# 性・性役割から見る自己受容性と精神的健康度に関する研究

**【問題・目的】**本研究ではアイデンティティの確立の時期でもある青年期後期の男女を調査対象者とする。性別だけでなく性役割ごとにも分類し，青年の自己受容性と他者受容性のバランス状態，心理的な幸福感を測定し，精神的な健康度を明らかにすることはアイデンティティ確立時期の現代青年を理解するのに，意義のあるものと思われる。そのために，青年の性役割観を検討した後に，性差だけでなく，性役割タイプの差からも主観的幸福感を検討する。さらに自己受容性と他者受容性のバランスを基に４群に分け，性別・性役割タイプ別にどの群が最も主観的幸福感を感じているかを明らかにする。このことから，現代青年がどの程度自身を健康だと感じているかを自己受容性と他者受容性のバランス関係からも検討することを目的とする。

**【方　法】**調査協力者は，男性121名，女性198名の合計319名，平均年齢は20.13歳（SD＝1.44）であった。調査方法は質問紙調査法によって実施した。

**【結果・考察】**その結果，性役割観については，性役割タイプの割合を検討したところ，男性は男性型を，女性は両性具有型を重視している割合が多かった。これは，女性は自身の性の性役割が高いだけでなく，異性の性役割も高いという両性が高い人が多く，男性は自身の性役割の方が高い人がまだまだ多いことを示唆する。男性は社会場面において自身の性役割が高いことに弊害がなく，女性は異性の性役割も高いことで，社会場面において適応していけるように考えられる。さらに，性役割得点と「主観的幸福感」の関連を見たところ，「女性性得点」よりも「男性性得点」と「主観的幸福感」との相関の方が強く，男女共に男性性が幸福感に繋がっていると思われる。また男女ともに両性具有型が最も幸福感を感じていることが明らかとなった。しかし，自己受容性・他者受容性と主観的幸福感と相関が見られず，バランス関係から見ても，その差はほとんど見られなかった。上村（2007）の研究では，バランスが良いと適応的かつ成熟した状態，精神的にも健康であることが確認されていたのだが，幸福感を感じているかどうかに関しては，自己受容性や他者受容性は関係がなかったと言える。本研究からは，男女ともに両性具有型の者が幸福感が高く，主観的幸福感は男性性と関連があることが分かった。しかし，自己受容性と他者受容性のバランスは本研究での精神的健康度はポジティブな側面のみを見ており，ネガティブな側面との関連は見ていない。またBem（1981）や石田（1994）は，男性・女性にとっての性役割の持つ意味は異なるという指摘をしており，今後はこれらの点も検討していくべきだろう。